

法人名・施設名	社会福祉法人亀鶴会 特別養護老人ホーム神明園
所在地(住所)	東京都羽村市神明台4-2-2
事業開始年月	1999年4月
定員	120名



●特別養護老人ホームとは・・・老人福祉法および介護保険法に定められた施設(介護保険法上の名称は指定介護福祉施設)。原則65歳以上で要介護度3以上の方等が対象(要介護度1, 2の方の特例入所が可能な場合もある)。費用は要介護度及び施設により異なる。食事や入浴、排泄など日常生活上の介護や身の回りの世話、機能訓練、レクリエーションなどの提供を行う。

※以下は、2022年度にグランドデザイン推進委員会が実施した調査の回答をもとに、委員が施設・事業所に取り組みをヒアリングした一部概要です。高齢協の「アクティブ福祉グランドデザイン 7つの宣言」のどの宣言に該当が整理しています。

宣言1 私たちは、質の高い高齢者福祉・介護サービスを提供します。

「生涯学習」の視点を重視し、「持ち上げない介護」を実施しています。

私たちは、入居者の方々に対し、「力」を最大限引き出すことを目指し、人間の可能性を信じた「生涯学習」の視点で暮らしを支援する取り組みを行っています。

月1回入居者懇談会を実施してやってみたいことをヒアリングし、「アクティビティ体験」を開催しています。「やってみたい」という意欲を引き出したいと考えています。「生涯学習」の視点は、スタッフにも入居者にもどちらにも必要です。特に、入居者の方に対しては、「今の文化」を提供したいと思っています。そのため、スタッフによるネイルサロンを開催するなどして、初めての体験をしてもらっています。



また、質の高い介護を行うため、「持ち上げない介護(特殊ベッドなどの機械を導入した介護)」をスタンダードにしています。東京都の次世代介護機器導入促進支援事業を活用しています。スタッフの身体への負担を考え、スタッフから声上がる前に導入しよう、と始めました機器の選定や導入、活用にあたっては6年ほど前からトライ&エラーを繰り返し、約2年前からは、スタッフが機械を探し、良いものを選定して導入する形になっています。いまでは、様々な種類の機器を活用しています。

宣言 2

私たちは、地域が求める高齢者福祉・介護サービスをつくります。

宣言 4

私たちは、生活困窮者などの地域公益活動を進めます。

地域公益活動の取り組みをしています。

神明園では、地域のニーズにこたえる地域公益活動に積極的に取り組んでいます。前園長が「地域に開かれた施設」であること、また「入居者の方を地域に出していくこと」を大切にしてきたことが土台となっています。社会福祉法人の責務として、地域公益活動の実施が社会福祉法上に位置付けられていますが、それ以前からの自治体や地域と連携の長い時間が土台となり、活動が進んでいます。

2018年に神明園の20周年を記念し、地域のへの施設機能還元の促進、および大規模災害対策の一環として、防災倉庫「神明台sTorehouse(ストアハウス)」を竣工しました。地域の方のための防災備蓄品を独自に備えるほか、炊き出し設備と飲食スペースを備えており、ここを公益事業活動の拠点とし公益的な取り組みを本格化しました。

2022年度からは、ボランティア活動の活用を見据えた多世代の居場所づくりプロジェクト「UI～結～」を立ち上げ、神明園が地域の人と人を結びつけ、様々な人の居場所になれるよう取り組んでいます。現在は次に紹介する活動を含め試行錯誤しながら行っており、今年度には地域の独居高齢者を主対象としたコミュニティ形成の支援に取り組む予定で、世代別から多世代の交流の場となれるよう計画しています。

人にはQOLが大切です。様々な人が関る事で「ここに来てよかった、楽しかった」「神明園に来ることがたのしみ」といった言葉がもっと聞けるよう、コロナ禍では難しさもありますが、ボランティアや地元の方々と協働した活動をしていきたいと考えています。



「かふえてりあ はろ」

2019年に“はろ”の前身となる子ども食堂を「羽村初」として開始。コロナ禍での休止を経て‘22年度よりリニューアルし“はろ”を開始。同時に、当時市内になかったフードバンクの立ち上げにも関わりました(現在民間委託)。

“はろ”は子どもたちに食事を提供するとどまらず地域課題を解決する活動を目指し“子ども食堂”の冠は掲げないこととしました。近隣の小中学校の小学3年生から中学生を対象に、毎週火・土曜日(週2回)の16時30分～19時に実施しています。1回100円で夕食と放課後の活動スペースを提供、子どもたちはゲーム、バドミントンなどの運動や勉強など好きな事をして過ごしています。

「神明台自習室 みらい」

近隣中学校の中学生を対象にした、テスト期間前1週間限定の夕食付自習室で、2019年度からコロナ禍での約2年の休止を経て、開催しています。「集中して勉強に取り組める」「食事を通して、大学ボランティアや地域の方々と交流できる」場として神明台sTorehouseを開放しています。

利用料1回100円。大学生ボランティアの参加がある日は学習サポートがあります。

宣言5

私たちは、地域の防災拠点としての役割を果たします。

専用の防災倉庫兼公益事業活動拠点を整備し、地域の方々の防災拠点にしています。

先ほどお話した通り、「神明台sTorehouse(ストアハウス)」は防災倉庫兼公益事業活動拠点です。地域への施設機能の還元と、大災害への危機管理の必要性を感じたことがきっかけで竣工したものです。

この中には、地域の方のため、食料や毛布、衛生用品のほか、災害時の炊き出し用にプロパンガスによる調理設備、発電機などを備えています。日頃の地域の方のための多世代カフェや子ども食堂等の活動でも設備を利用いただき、場や設備に慣れ親しんでもらっています。近隣地区内にあまり設置されていないAED機器なども早い段階で設置しました。

地域住民を交えた防災訓練の際は、ここに避難された住民の方たちが、職員の手を借りずに自分たちだけでも使用出来ることを基本に、使用可能なスペースや物品の確認、操作方法の実践を行っています。

地元の方には、「いざとなったら神明園に行けばいい」と思ってもらいたい。そのためには、神明園そのものを知っていただくことが大事だと考えています。

また、施設としては、羽村市内にある全3法人合同で、日頃から災害に向けた定期的な協議や防災訓練を実施しています。熊本地震を通じて熊本の施設の方等ともつながり、密な連携をとっています。発災時には、市内の法人が情報の共有、人的支援、物的支援、利用者の受入れをすることで、利用者への介護サービスの継続を図れるように体制を整えています。



宣言7

私たちは、地域に貢献する福祉人材を育てます。

「ANI・ANE制度(チューター制度)」や施設内外のスタッフ同士の交流で人材育成・定着を図ります。

人材育成には、様々な形で取り組んでいます。一斉に研修を受講する方式では限界を感じ、7年前から、特定の職員同士の組み合わせで教えあう「チューター制度」を導入しています。近い立場の先輩が教える方が効果的だと感じ、面白がってもらえるよう「ANI・ANE(あに・あね)制度」という名前をつけています。お互いが試行錯誤するきっかけになってほしいと思っています。

10数年前より、スタッフからの提案で、スタッフ同士が互いに記入していいところを褒めあう「インプレッションカード」を導入しています。口下手で褒めることが苦手な人も、書くことで誰かを褒めることができ、褒められた人のモチベーションアップにつながっています。カードに書かれた内容を見ることは勉強にもなり、よい効果が生まれ、労働環境の改善や向上につながっています。外部からの見学者にも好評です。こうした取り組みの影響か、離職率は低くなっています。

これらに加え、2019年度からは、「オヤッとハッと」制度も導入しました。コロナ禍では感染対策のため入居者の家族や外部の方が施設内に立ち入ることができなくなっています。スタッフ自身を感じなくても、第三者からみたら「虐待」と思われる行為の芽を積むためにも、人の目の必要性を痛感しています。人権擁護、虐待防止には細心の注意を払っています。そのためにスタッフ同士が互いに気になる行動を伝え合う制度です。この取り組みは、職員同士の人間関係再構築のきっかけにもなっています。

市内の他法人とは、相互乗り入れの研修をコロナ禍ではオンラインで行っています。介護・機能訓練・栄養士など、それぞれの職種別でも交流があります。当初は、他の施設を見ることで他への人材流出につながるかと懸念していましたが、そうした懸念は必要なく、むしろ他施設のやり方を知ることは互いにより勉強になっています。自施設の良いところ・悪いところを確認し、改善するきっかけにつながっていると思います。



地域や社会のみなさまに知っていただきたいこと、今後の目標

- 地域には、神明園のこと、さまざまな取り組みや活動をより一層知ってもらいたいと思っています。また、活動にも参加してほしいと考えています。
- 今後は、制度の狭間にある様々な問題を、いかに各地域で補っていけるかが大切になってくると考えています。人と人、地域の中でのつながりの希薄化を感じるので、自分たちが人が集まる場を作り、情報発信していきたいです。住んでいる地域によって受けられる制度や支援に違いが出ることをないよう、取り組みの中から福祉の視点で、制度化することへとつなげていきたいと考えています。
- 特別養護老人ホームは、多くの人、特に地元の人にとっての「未知の空間」であってはならないと思います。施設、法人は地域に求められる存在である必要があります。イベント時だけでなく、日常的に自然と地元の方が関わり、園内を歩けるような場にしていきたいと考えています。地域とのより強いつながりを築き、地元の高齢者福祉のシンボルのような存在、いざとなったら「神明園に行けば何とかなる」と思ってもらえるように取り組んでいきたいと思っています。

取材概要

日 時 : 2023年2月9日
 取材対応者 : 神明園 施設長 中村正人氏、役務部長 中村直人氏、係長 岩淵百合子氏
 取材者 : ファミリーマイホーム 施設長 田代航也氏
 記録 : 伊集院尚子(ニッセイエプロ)

